

家庭洗濯に関する研究（第15報）

—最近のアイロン仕上げ行動と生活者意識—

○小林 美奈子・一柳 厚史・肥後 盛明（ライオン家庭科学研究所）

【目的】アイロンがけは洗濯と同様に古くから一般家庭に普及している家事であるが、洗濯が洗剤や洗濯機の変化により著しく簡便化したのに対し、アイロンがけ行動はスチームアイロンが普及したことを除くと、スタイルそのものにほとんど変化がなく、依然として担い手の技術に負うところが大きい家事である。一方、化繊衣類や形体安定加工衣類の普及にともない家庭でのアイロンがけニーズの変化が予想される。本報では現在のアイロンがけ行動の実態を調査・解析し今後の衣類の仕上げ行動について考察を行った。

【方法】一般家庭380世帯において留置式のアンケート調査を実施した。内容は、家庭における衣類のアイロンがけに関する理解度・関心度・対象衣料・実際の行動・最近の衣類の仕上げ用製品に対する関心度と活用度・商業クリーニング利用状況・ノーアイロン衣類保有状況について調査を行い、多変量解析などにより解析を行った。

【結果】生活者の意識においてはアイロンがけは他の家事と比較すると特殊な技能を要する家事に分類される傾向があり、洗濯のように万人に同じように必要とされ、好かれる家事であるとは言い難い。その理由を探るため生活者をアイロンがけ行動と意識によって分類し、分析を行ったところ生活者のアイロンがけに対する意識レベル及びアイロン仕上げ技術レベルには大きな個人差があることがわかった。一方、メーカー側のすすめるアイロン操作方法と生活者のアイロン使用方法の実態とは幾分ギャップがあり、対象となる繊維素材の特性やアイロンそのものについての適切な知識が生活者に十分浸透してはおらず、それが個人の仕上げ技術レベル差に影響を与える一因となっていることが判った。